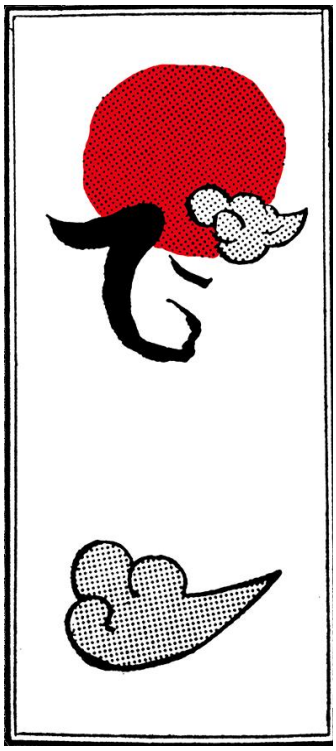

第 62 号
月 1 回 発 行
ひの心を継ぐ会
〒799-1336
住所:愛媛県西条市
上市甲 720-1
TEL:080-2986-0856

領　綱

一　私達は明徳を明らかにします
一　私達は国家の鎮護となります
一　私達は大和世界を建設します

古事記

天地の初発のとき
―西洋哲学―（八）
反省的方法―

竹葉 秀雄

二、認識批判 カントの先験論（二）

カントは此論理を欠く為めに先験哲学に最後の統一を与えることが出来ず、合目的性の根拠を確立せんとする「判断力批判」に於て右の統一に対する要求を示しながら、之を認識の立場に確立することを能くしなかった。理性の自覚としての哲学は遂に単に抽象的な主観の自覚に止まり、主観に対立する客観を媒介にして絶対的に自己を自覚する具体的主観の自覚に達しなかったのである。（木落ち水尽き千崖枯る。廻然我亦真吾を見る。朱子四時読書楽や、近江の海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしぬに古へ思ほゆ。万葉集にみるように東洋日本に於てははやくからこの境地に達していたのである。）是れその二元主義を超克する能わず体系に最後の統一を与えることが出来なかった所以である。彼以後の哲学が其処に発展の動機をもち、終にヘーゲルの弁証法的哲学に至って一応の完成に達したのも其為めである。

然し、ヘーゲルの弁証法も所謂観念弁証法にとどまり、理性の歴史的現実無視に導く結果、実証的認識と矛盾して哲学の不信を誘致したのに鑑み、今日の（新）カント学派は飽くまでカントの批判主義的立場を維持し、ただ其二元主義を動的過程の無限を以て一元化せんとする。其方法論的に完成せるものとしてコーヘン（Cohen,1842-1918）の根源論理 Logik des Ursprungs を挙ぐべきであろう。これは限定せられたる有の根源を非有の媒介に由って、無限に限定せらるべくして常に限定せられざる全体に求めんとするもの、批判主義の立場に於て考えられたものとしては最も多く弁証法に接近する論理といってよい。併しそれは弁証法の核心を成す非連続的対立者の転換飛躍統一の代りに、数学の微分法に依る連続の統一を置換えんとするもの、弁証法を予想して成立する具体的事態を、作用の自覚から、作用の客観化としての数学的論理の方向に射影したものであるから、実は弁証法無くして其最後の根柢を自覚することが出来るものでない。之を予想してただ所謂方法主義の立場からそれを無限の過程に解消せんとするものたるに止まる。斯くて先験論的方法が哲学の方法たる為にまで高められなければならぬ所以が一層明かにせられるといってよかろう。

農士道

第六章　日本農道の本義

～第一節　日本精神の真髄～

三、「ひ」の本と「ひ」の末

菅原　兵治

「ひ」とは前述の如く、一切を生み成す生命力である。而して其の生命力の実際の活動に当っては、二つの作用がある。

「ひ」の本と「ひ」の末

二つの作用とは何ぞや。生命――造化――即ち「ひ」のはたらきに、分化発現と統一収蔵との両作用あることは、已に第一章に於て詳述せる所であるが、即ちこの両作用が存するのである。今これを樹木の本末関係に就いて見るに、生命力が根(本)から枝葉の末に向って発現する作用が「ひの末」のはたらきであり、之に対して枝葉から根(本)に向って潜蔵する作用が「ひの本」のはたらきである。日本精神とは「ひの本」の心であるといったが、そはかかる意味に於てのものであって、西洋的思想が主として「ひの末」する作用なるに対して、日本精神は「ひの本」するはたらきに其の特徴を有するということなのである。然し日本精神は「ひの本」するはたらきを特徴とするからといって、「ひの末」のはたらきが全然無いというのでは勿論ない。若し「ひの本」のはたらきのみで、全然「ひの末」のはたらきが無いとしたならば、かかるものは已に造化の生ける生命より離脱せる残骸の化石に過ぎない。脈々として波打つ血潮の通う生ける日本精神たる以上、勿論時に随って「ひの本」するはたらきも「ひの末」するはたらきもある。しかし何れかといえば西洋思想が「ひの末」のはたらきの原理に立つに対して、我が日本精神(広くいえば東洋思想)は、「ひの本」するはたらきを特徴とするという意味なのである。

然らば「ひの本」と「ひの末」との作用の特徴を具体的にいえば如何なる点にあるか。以下之を明かにしたいと思う。

生命の作用が「ひの末」に向うに従って、例えば一本の幹が二本の枝となり、二本の枝が四本の枝となるという様に、次第に分裂して末梢化する。之に対して生命の作用が「ひの本」に向うに従って、例えば四本の枝が二本となり、二本の枝が一本の幹となる様に、次第に総合せられて本に復って来る。此の分裂と、総合とは実に「ひの末」作用と「ひの本」作用との原理的差異点である。而してこれを更に人間的生活の原理として考察すれば、「ひの末」作用は分裂するが故に、当然自他の対立を生じ、他に対して自を主張せんとして我執を生じて、其の結果は亦当然極端なる排他主義となる。我執排他は「ひの末」作用の本質的特徴である。

これに対して「ひの本」作用は、譬えば犀(さい)と千曲の両川が合流して信濃川になって了えば、もはや犀川と千曲川との区別が無くなって了うと同様に、自他彼此の対立が無くなって了う。換言すれば没我を其の特徴とする。没我とは、より大いなるもの(大我)の為に、対立的なる小我を捧げ尽して奉仕することである。此の没我奉仕こそ、実に「ひの本」精神の真髄である。

以上「ひの本」原理と「ひの末」原理との要点を表記すれば次の如くになる。

「ひの末」	「ひの本」
分裂	総合(大和)
我執・排他	没我・奉仕

便利さが奪ったもの

三浦　夏南

今月は代かき、田植えに忙しい一ヵ月であったが、人手不足の現代農業は、少ない人数で大きな面積を管理する必要から、どうしても機械にばかり頼る農業から離れることが難しい。それもそのはずで、かつては一家族五反以内という小規模農業が当たり前だった時代から、今では一人が機械を駆使して何町歩も耕作するのが当たり前になっている。数町どころか何十町もの面積を一人で耕している農家も少なくないのが現実である。三反百姓という言葉があった時代が懐かしいぐらいである。

最近の機械化の完備した米農家は土に触らないと言ったりするが、本当にその通りで、稲作ほど機械が進展している作物はないかもしれない。苗立てから耕耘、代かき、田植えまで何から何まで機械作業である。便利になって仕事が楽になったから良いじゃないかと、農の世界を外から眺めている人は思うかもしれないが、実際に農業を現場でやってみると、機械作業による便利さが農の世界から奪ってしまったものの大きさに愕然とする。

表面的には楽になったように見えるが、楽になったのは肉体を動かす労力が表面的になくなっただけで、そのしんどさは精神的な疲れへと転化されただけである。効率や時間に追われながら、今日のノルマを単純な機械作業の中でこなして行くことは、機械作業が単調であるだけに苦痛である。さらに我々のような中山間地域では、トラクター、田植え機での出入りや、畦際でのハンドルの取り回しは、ややもすると高所からの落下に繋がり、少しの運転ミスが大きな事故にも繋がる。単調な機械作業と、少しのミスが命に繋がる状況が交互にやってくるので、機械作業を一日終えた後には、精神的な疲れがどっと出るものである。肉体的に楽といっているのも、外面的にそう見えるだけであって、一日中緊張感のある中での運転は意外にも大きな疲れになっている。農家が運動不足による体調不良に陥り易いのもここに原因がある。

面積管理の為の機械農業の一方で、我々は自給自足の農業も進めているが、鍬を使った昔ながらの農業は、進んで行く時間の感覚と言い、体のほど良い疲れと言い、時間を忘れて農作業に没頭し、ほどよい肉体的疲労感を感じることが出来る。まさに今生きていく為に働いているという実感を最も得易い農業である。騒がしい機械音もないので、鳥のさえずりや虫の声に耳を澄ませたり、家族で何気ない会話をしながら進めることの出来る農作業は大変楽しいものである。機械の農業を体験している分、この農業こそ真実の農業であり、人に生きる生きがいを与える正しい仕事のやり方であることが、身に沁みて分かってくる。

この世にはエネルギー保存の法則があり、機械により効率化され利便化された仕事の背景には必ず失った何かがある。無条件的に農業が楽になったということはない。表面的な発展の裏で失われている本来の農業の働き甲斐こそ、古の人が最も大事にしたものではなかっただろうか。我々は機械農業と昔ながらの農業とをどちらもバランスよく経験することが出来ている。その実感を基に本来の農業に回帰して行けるよう頑張らねばならぬと改めて思うことが出来た今回の田植えとなった。

とよくも農園だより

三浦 美恵

暖かくなり、日中はすでに夏を彷彿とさせる暑さを感じるようになりました。そんな五月は、田おこし、肥料散布、代かきと準備してきた圃場でついに田植えを行いました。今年は昨年よりも丁寧なお米栽培を心がけており、また面積も拡大したため、全ての作業に時間がかかります。地元の先輩農家さんと協力して、男手四人が、毎日朝から晩まで一週間かけて代かきをし、田植えを行い、無事機械作業での田植えを終えるPことができました。

今回の大規模米栽培は、経営戦略のためとはいえほぼ全て機械作業。主人も書いているように、田起こし、肥料散布、代掻き、田植え、どれも一人で黙々と機械を動かしていくものです。新たな大型機械を導入するたびに日本の古き良き家族農業が失われたことを感じ、改めて家族で行う手作業での農作業の時間を大切にしようと家族会議を行いました

まずは家族全員で鍬をもって畑に集まり、子ども達も一緒に手で苗床を立てていきます。その後は手で種を播き、水をやり、畑の畦で刈った草や、万葉苑清掃の際に宮内さんから頂いた手作りのバーク堆肥を上から被せていきます。最後に子ども達の木の立札を立てて田植えの準備を終えました。機械でのお米栽培を先に体験したからこそ、手作業で行う家族農業の重要性を切に感じました。今後は育った苗を家族みんな、手で一本一本植えていく予定です。また、トラクターの清掃や田んぼの機械作業が出来ない端を鍬で耕したりして、子供達もできるだけ田んぼで一緒にお仕事をするようにしています。

その他に今月の三浦家で大きな出来事は、馬が来たことです。馬耕のために静岡の乗馬クラブからトラックで連れてきてもらい、知り合いの馬小屋を使わせてもらって飼い始めました。今は朝夕の餌やりと散歩が大きな仕事となっています。すぐに田畑を耕すことは難しいですが、まずは慣れ親しみ、徐々に一馬力として活躍してほしいと思っています。

暖かくなってきて、草の勢いが日に日にまし、先日草刈りをした場所からすぐに草が伸び、草との追いかけっこになってきました。昨年まではただ刈るだけだった草ですが、鶏や馬への餌とすることができるようになり、少しずつ三浦家内で循環ができるようになってきています。できるだけ自給がしやすいもの、作りやすいものを食べて生活しようと、食卓も常に変化しています。まだまだ完全自給には到達できていませんが、子供達と一緒に日進月歩で毎日研究と実践を積み重ねていこうと思います。

私が少し早めに昼ご飯準備に戻り料理をしていると、子ども達は汗だくになってお仕事をし、程よい疲れと満足そうな顔で家に戻ってきます。その表情を見ると、家族で農業を本として暮らすことの幸せ、当然さを確信します。お天道様に感謝し、今日も家族で農業に励みたいと思います。

★今後の予定

勉強会：六月十日（土）十九時～

ひの心を継ぐ会事務局（西条市上市甲七二〇ー一）

※参加される方は事前に（080-2986-0856）までご連絡ください。

★一燈照偶 万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

★年会費

一般会員	三千円
賛助会員	一万円
特別賛助会員	三万円
支援会員	一万円

★振込口座

愛媛銀行　普通預金　本町支店

口座番号　六一四二七三五

『ひの心を継ぐ会』